

令和元年5月19日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02579

研究課題名(和文) 連環画の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study of Lianhuanhua

研究代表者

武田 雅哉 (TAKEDA, Masaya)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：40216908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀中国のプロパガンダメディアである連環画(絵物語)および児童向け絵本を取り上げ、人々のイメージの生成と伝播、受容の様相を明らかにせんとするものである。研究期間中、年一回の研究会を開いて多くの研究者と学術交流をし、その成果を研究誌『連環画研究』にまとめた。またデータベース化に関する作業も行なった。また、代表者の武田は関連書籍『中国のマンガ 連環画の世界』を上梓し、連環画という素材が20世紀の中国研究にとって非常に重要な位置を占めるものであることを、一般に向けて広く示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

連環画は絵と文章とで物語をつづるメディアであり、時期ごとの政策や社会情勢が反映されるものであるため、人々の生活を知る上での恰好の素材であるが、研究対象として扱われてきた歴史が浅いこともあって、その研究に際しては、データベース構築や資料収集といった基礎的な作業が求められている。またその表現にも、映画や演劇、新聞や雑誌といった他のプロパガンダメディアや、中国絵画の伝統などが影響するため、多方面からのアプローチが必要な素材でもある。本研究は、そのような連環画の研究を、少しでも推進させるべく、年に一回の研究会を開催し、学術交流を行なった上で、その成果を雑誌にまとめて世に発信した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the aspects of propagation and acceptance of images created by people, by examining the 20th century Chinese propaganda media, comics (Lianhuanhua, 連環画) and picture books for children. During the research period, we conducted a workshop and had academic exchanges with many researchers once a year. The results were compiled in the journal titled, "The study of Lianhuanhua (連環画研究)." We also carried out the work for constructing a database.

During this period, Masaya Takeda, the representative of the group, published a related book and showed to the public that this material was very important for research concerning 20th century China.

研究分野：中国文学

キーワード：表象

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中国のプロパガンダメディアの一つである連環画(絵物語)を扱うものである。連環画とは、通常1頁に1コマの図版と説明文が入った、手のひらサイズの、中国の絵物語を指す。中華民国期に生まれたものであるが、新中国成立後、題材や書式が社会主義の方針に沿ったものに改められ、中国共産党のプロパガンダメディアとして確立した。

題材は中国の古典小説や歴史物語、革命物語や偉人物語、外国文学などを初めとして、現行政府の政策や大衆啓蒙を反映するものなどがあり、形式もまた、線描画や剪纸芸術、年画を用いたものや、舞台上演を場面ごとに描いたものや撮影したもの、映画のスチル写真やキャプチャー画面を用いたものなど、非常に多岐にわたる。

中国の視覚メディア史の研究は、欧米が先行しており、中国においても90年代後半より進められてきてはいるが、日本においてはまだまだ立ち遅れた状況にある。個別研究も、作家や作品の表象特徴について論じるものも出てきてはいるが、その書式や文法、流通形態、受容状況、メディア間の越境にともなう物語変容などに目配りする研究はいぜん数が少なく、またそもそもが民衆教育の手段である一方で、娯楽的に消費される傾向の強いメディアであることから、現物が図書館などで所蔵・保存されにくかったという状況もあいまって、いまだ初歩的な整理の段階にとどまっていると言える。

2. 研究の目的

本研究では、20世紀の中国において、プロパガンダメディアとして広範に普及した連環画(絵物語)に着目し、そこに見られるイメージの生成と伝播、受容の様相を明らかにする。そしてとくに、時期ごとの形式と内容の変遷、雑誌や映画など他のメディアとの影響関係、旧ソビエトや日本の視覚メディアとの比較などに取り組み、連環画に見られるイメージを多角的に分析し、現代の中国にも引き継がれるその形成と発展のメカニズムを考察・解明する。

3. 研究の方法

主な研究計画・方法は、以下の5点である。

- (1) 定例研究会の開催(年1回): 研究成果と研究情報および資料の共有、研究の打ち合わせ。
- (2) 資料調査の実施: 中国における資料調査を行なう。
- (3) 資料のデータベース作成。
- (4) 関連論考の学会・研究会における発表。
- (5) 研究成果の刊行。

4. 研究成果

(1) 定例研究会の開催

年1回の研究会を開き、研究成果の発表、研究情報の共有、資料閲覧、発展のための打ち合わせを行なった。また画像関連の研究業績を持つ専門家を招き、会の活性化を図った。詳細は以下の通り。

2016年度: 2016年10月1日(北海道大学)

研究報告: 尹芷汐(名古屋大学)、藤井得弘(北海道大学大学院博士後期課程)、田村容子(研究分担者)、加部勇一郎(研究分担者)、瀧下彩子(東洋文庫)、武田雅哉(研究代表者)

2017年度: 2017年9月16日(北海道大学)

研究報告: 南雲大悟(日本大学)、中根研一(北海学園大学)、瀧下彩子(東洋文庫)、山田千尋(北海道大学大学院修士課程)、張佳能(北海道大学研究生)、加部勇一郎(研究分担者)、越野剛(研究協力者)、田村容子(研究分担者)、武田雅哉(研究代表者)

2018年度: 2018年9月15日(北海道大学)

ゲストスピーカー講演: ミンガド・ボラグ氏(内モンゴルシリンゴル盟職業学院教育学部)
研究報告: 南雲大悟(立教大学)、張佳能(北海道大学研究生)、加部勇一郎(研究分担者)、張江林(北海道大学大学院修士課程)、越野剛(研究協力者)、田村容子(研究分担者)

(2) 資料調査の実施

平成28年度に分担者加部は、中国(北京・天津・上海・寧波)を訪問し、連環画を収蔵す

る資料館や連環画家(賀友直)の記念館、各都市の連環画を扱う古書市場などをまわり、資料収集および調査活動を行なった。

(3) 資料のデータベース作成に関する作業

中国で発行された連環画関連の研究誌や、児童向け絵本、児童向け雑誌などを対象として、スキャン作業を行ない、データベース構築のための基礎作業を実施した。これらは将来的に、一般公開を目指す予定である。

(4) 学会・研究会における発表および関連論考の紙媒体およびWEB上における発表

平成28年度から30年度にかけて、研究代表者と分担者は、研究成果を論文、口頭報告、書籍などの形で発表した。詳細は「5.主な発表論文等」を参照されたい。

代表的な成果として、代表者武田による専門書『中国のマンガ 連環画の世界』(平凡社、2017)が挙げられる。これは日本の連環画研究に先鞭をつけるものである。連環画の歴史はもちろん、代表的作家の紹介や人々の受容状況、さまざまな種類や、時期ごとの変容のさまが詳細に記され、中国文化研究における連環画というメディアの重要性を示すものとなっている。

(5) 研究成果の刊行

また、年に一回、研究誌『連環画研究』を発行した。掲載された内容は、連環画史や連環画家の活動に関するもの、作品の表象特徴に関するもの、海外文学や古典文学の連環画化に関するもの、剪紙連環画や電影連環画など形式に関するものなど、非常に多岐にわたる。それらは、連環画(漫画や絵本を含む)という対象の興味深い様相を明らかにし、同時に、連環画というメディアの抱える問題の豊饒性を示すものとなっている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計15件)

武田雅哉、犀を想う：『西遊記』挿絵・連環画の犀牛怪図像、連環画研究、査読なし、8巻、2019、107-127

田村容子、続・どうやって連環画をかくの？：『連環画報』投稿者たちの軌跡、連環画研究、査読なし、8巻、2019、85-106

加部勇一郎、台湾を描いた連環画を読む、キツチュ、査読なし、2巻、2019、61-68

加部勇一郎、アーカイブ化される連環画、連環画研究、査読なし、8巻、2019、128-129

越野剛・田村容子、連環画の中のソ連幻想：女性兵士の物語『朝焼けは静かなれど』、連環画研究、査読なし、7巻、2018、48-66

加部勇一郎、新中国の三毛：『三毛翻身記』(1951)を読む、連環画研究、査読なし、7巻、2018、87-109

加部勇一郎、懐古か諷刺か：アニメーション『紅い風船』を読む、大朋友、査読なし、2巻、2018、71-86

武田雅哉、「三国演義」連環画とその日本版、連環画研究、査読なし、6巻、2017、152-161

田村容子、どうやって連環画をかくの？、連環画研究、査読なし、6巻、2017、125-145

加部勇一郎、花とオジさん 20世紀における『鏡花縁』物語の描出と受容、連環画研究、査読なし、6巻、2017、110-130

加部勇一郎、2016年の賀友直 逝去の報に接して、連環画研究、査読なし、6巻、2017、2-11

武田雅哉、闘争する 小さなものたち 文化大革命と連環画、東亜、査読なし、588巻、2016、20-27

武田雅哉、「『乳房』の図像と記憶 中国・ロシア・日本の表象比較研究」からの中間報告、乳房文化研究会 2015年度 講演録、査読なし、1巻、2016、159-176

田村容子、男旦(おんながた)が脱ぐとき 中国演劇における乳房の表現、乳房文化研究会 2015年度 講演録、査読なし、1巻、2016、125-145

加部勇一郎、大きな中国、小さな絵本 連環画の魅力について、キツチュ、査読なし、1巻、2016、338-343

〔学会発表〕(計 10 件)

加部勇一郎、連環画を用いた“童年”研究の可能性について：賀友直『賀友直画自己』を中心に、中国空想メディア研究会、2019

田村容子、中国の「連環画」のなかの女たち、日本比較文学会第 44 回中部大会シンポジウム「女性とメディア」(招待講演)、2018

武田雅哉、中国のマンガ??? 連環画 の世界、第 20 回北大人文学カフェ(招待講演)、2017

越野剛・田村容子、連環画の中のソ連：女性兵士の物語『朝焼けは静かなれど』の受容、連環画研究会、2017

TAMURA, Yoko & KOSHINO, Go, Images of Female Soldiers in Russia and China: Chinese Acceptance of the Soviet Film The Dawns Here Are Quiet, Eighth International Symposium on European Languages in East Asia; Acceptance, Absorption, and Transformation in Languages, Literatures, and Cultures, between East Asia and Europe (招待講演)(国際学会)、2017

加部勇一郎、新中国の“三毛”物語について、連環画研究会、2017

武田雅哉、どうやって連環画史をかくの?、連環画研究会、2016

田村容子、どうやって連環画をかくの?、連環画研究会、2016

加部勇一郎、『鏡花縁』のビジュアル化とその 20 世紀における受容について、連環画研究会、2016

武田雅哉、連環画のおしゃべりな 顔、非文字資料研究センター 租界班 第 53 回研究会、2016

〔図書〕(計 8 件)

武田雅哉、慶應義塾大学出版会、西遊記：妖怪たちのカーニヴァル、2019、248

田村容子、中国文庫、男旦(おんながた)とモダンガール：二〇世紀中国における京劇の現代化、2019、406

加部勇一郎、北海道大学出版会、清代小説『鏡花縁』を読む：一九世紀の音韻学者が紡いだ諧謔と遊戯の物語、2019、346

武田雅哉編著、岩波書店、ゆれるおっぱい、ふくらむおっぱい：乳房の図像と記憶、2018、240

武田雅哉著、仁釣華訳、中華書局、構造另一個宇宙：中国人的伝統時空思維、2017、249

クレイグ・クルナス著、武田雅哉訳、国書刊行会、図像だらけの中国：明代のヴィジュアル・カルチャー、2017、352

武田雅哉、人文書院、中国飛翔文学誌：空を飛びたかった綺態な人たちにまつわる十五の夜囁、2017、568

武田雅哉、平凡社、中国のマンガ 連環画 の世界、2017、372

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：田村 容子

ローマ字氏名：(TAMURA, yoko)

所属研究機関名：金城学院大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：10434359

研究分担者氏名：加部 勇一郎

ローマ字氏名：(KABE, yuichiro)

所属研究機関名：北海道大学

部局名：文学研究科

職名：専門研究員

研究者番号（8桁）：30553044

(2)研究協力者

研究協力者氏名：越野 剛

ローマ字氏名：(KOSHINO, go)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。